

第13話 福原遷都

下の公卿^{くぎょう}を引き連れて京都を出発した。福原はもともと清盛^{べっそう}の別荘のあるところで、皇室を自分の勢力が完全に及ぶ^{およ}処^{ところ}に置いて、源氏や僧兵らに一本の指も触れさせまいとしたのでしょ

う。平家が天皇を奉じて居れば、その相手はいつも朝敵になるのですから、清盛の強みにしようとしたのに不思議はありません。

福原の地形^{ちけい}

又、福原の地勢が、うしろは山に囲まれ、前には兵庫の港^{ひょうご みなと ひか}を控えて、東に生田の森、西に一の谷の嶮^{いくた いち たに けん}を以って自然の城郭^{じょうかく}をなしてもいたので、その頃瀬戸内海から九州にかけて最も勢力を張っていた平家が、ここを根拠地^{こんきょち}にしようとしたものだともみられます。(訳注：福原の外港である大輪田泊^{がいかう おおわだのつまり} (神戸市) を利用して、清盛は中国と日宋貿易を行い富を得た。)

歎きの新都^{なげき しんと}

けれども、この遷都^{せんと}はいかにも早急^{そうきゅう}な思い立ちだったので、その翌日に一同が福原に着いても、そういう多くの人々を入れる家の用意がありませんでした。皇居には、取りあえず頼盛^{よりもり}の別荘を当て、上皇と法皇とは清盛^{のりもり}の別荘と教盛^{のじゅく}の別荘とにお入れしたが、朝廷の役人の多くは野宿をしなければならないような有様でした。それで、公卿^{ありさま}や殿上人^{でんじょうびと}は、まるで島流しにでも遭ったような気がして、この遷都を大いに悲しんだが、清盛は、そんな事には一向に頓着^{いっこう とんちやく}しなかった。彼は新たに宮城の土地を定めて皇居^{こうきょ}の造営^{ぞうえい}にかかり、その11月11日にはそれが出来上がって、天皇は新たらしい内裏^{だいり}にお遷り^{うつ}になりました。

(第13話 福原遷都^{ふくわらせんと} 終わり。 次は前頁に戻り、第14話 源氏の挙兵 へ)